

令和 2 年
7 月 3 1 日

病害虫発生予報 8 月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

農薬散布の際は事前に近隣農家や周辺住民に連絡しましょう
～令和 2 年度茨城県農薬危害防止運動期間(6/15～9/14)～

< 目 次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水稲：いもち病（穂いもち）	1
【防除所レポート】BLASTAMによる葉いもちの感染好適日の状況について	1
水稲：紋枯病，斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ，イネカメムシ）	2
サツマイモ：ナカジロシタバ	3
ナシ：ナシヒメシンクイ（第四世代幼虫）	3
果樹共通：チャバネアオカメムシ	4

【その他の病害虫】

水稲，ナシ，ブドウ，秋冬ネギ，夏秋ナス，共通害虫	5
--------------------------	---

II. 今月の気象予報 6

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/>

フェロモントラップデータ随時更新中

<HP QR コード>



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. いもち病（穂いもち）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、病害虫防除所巡回調査圃場の葉いもちの発病度¹⁾（本年値 3.8、平年値 2.5）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 49%、平年値 39%）は平年並～やや高い。
- ② 7月下旬現在、県予察圃（水戸市、無防除）の葉いもちの発病度¹⁾（本年値 23.5、平年値 14.8）は平年より高い。
- ③ 7月1日～30日の葉いもちの感染好適条件（BLASTAM²⁾による）の出現日数は平年より多い。特に7月中旬～下旬は広範囲で複数回の出現が認められるため、穂いもちの伝染源となる上位葉での発病増加が懸念される。（下記、防除所レポート参照）
 - 1) 発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。
 - 2) BLASTAM：アメダスデータを利用した葉いもちの発生予測プログラム。

[防除上注意すべき事項]

- ① いもち病菌がイネの穂に侵入しやすいのは、出穂直後から出穂後14日位までである。この期間に降雨が続く場合は、発生に注意する。
- ② 穂いもちを対象とした液剤による防除適期は、穂ばらみ末期～穂揃期である。葉いもちが多発し、上位葉に病斑が進展している水田では、防除を徹底する。
- ③ 葉いもちが上位葉で多発し、出穂期に降雨が続いて穂いもちの多発が予想される場合には、収穫前日数等に注意し、傾穂期（穂揃期10日後ごろ）に追加散布を行う。
- ④ 殺菌剤を複数回使用する場合、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤を選択する。
(令和2年7月31日発表 病害虫発生予察注意報第4号参照)

防除所レポート [BLASTAMによる葉いもちの感染好適日の状況について]

- ① 7月1日～30日の葉いもちの感染好適条件（BLASTAM¹⁾による）の出現日数は平年より多い（表1）。特に7月中旬～下旬は広範囲で複数回の出現が認められるため、穂いもちの伝染源となる上位葉での葉いもちの発病増加が懸念される。
- ② 葉いもちの発病は、感染好適条件が出現した日から7～10日後に始まると考えられる。
- ③ 各地点のBLASTAMによる葉いもちの感染好適日の詳細については、病害虫防除所ホームページを参考にする。

1)BLASTAM：アメダスデータ4要素（気温、降水量、風速、日照）から、その日が葉いもちの感染に好適であったかを判定するプログラム。

表1 BLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の地域別の平均出現日数（7月1日～30日）

	県北	県央	鹿行	県南	県西
本年値	9.8	8.0	3.0	6.0	11.3
平年値	3.0	2.6	2.0	1.8	2.3

（単位：日）

注) BLASTAMは、特定点の発生を予測するものではなく、広域にいもち病が感染する時期を推定するシステムであり、最寄りのアメダス地点だけでなく、周辺のアメダス地点の出現状況も併せて判断する。また、圃場の条件、栽培条件、防除体系などは考慮されていないため、最寄りのアメダス地点で感染好適条件が出現していても、圃場によっては感染に好適な条件になっていることもある。あくまで広域的な感染好適条件出現の目安とし、圃場毎の条件等にあって発生に注意する。

(水稲 続き)

2. 紋枯病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、紋枯病の発病株率（本年値 0.8%、平年値 0.9%）、発生地点率（本年値 11%、平年値 9%）はともに平年並である。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 病斑は水際に近い下部の葉鞘から現れ、次第に上位に進展するため、薬剤散布は下部の葉鞘にまでかかるように行う。
- ② 前年発生がみられた圃場では本病が発生しやすいため特に注意し、発生が認められた場合は、収穫前日数等に注意して早期に防除を行う。

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、イネカメムシ）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、水田内におけるクモヘリカメムシの 10 回振りすくい取り虫数（本年値 1.61 頭、平年値 0.31 頭）は平年より多く、発生地点率（本年値 12%、平年値 11%）は平年並である。
- ② 7月下旬現在、水田内におけるイネカメムシの 10 回振りすくい取り虫数（本年値 0.08 頭、平年値 0.03 頭）は平年よりやや多く、発生地点率（本年値 5%、平年値 2%）は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 成虫を対象とした防除適期は、穂揃期である。穂揃期に成虫を確認した場合は防除を実施する。
- ② 幼虫を対象とした防除適期は、出穂 10～15 日後頃（乳熟期）である。乳熟期以降の幼虫密度が高いと斑点米の発生量が多くなることから、斑点米の発生を抑えるためには、この時期の幼虫密度を低下させることが重要である。
- ③ すでに防除を実施した水田であっても、その後幼虫がふ化したり新成虫が再飛来したりするので、発生を認めた場合は追加防除を実施する。
- ④ 周辺より出穂の遅い水田では、周辺の水田で増殖した新成虫の飛来により密度が高まることがあるので注意する。
(令和 2 年 7 月 28 日発表 病害虫発生予察注意報第 3 号参照)

サツマイモ

1. ナカジロシタバ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、被害つる先率（本年値 3.2%，過去9年平均値 7.0%）、発生地点率（本年値 60%，過去9年平均値 47%）ともに平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 本種は、9月上旬頃から発生する第三世代幼虫の被害が最も大きいので、早めに圃場を観察し発生に注意する。
- ② 老齢幼虫になると防除効果が劣るので、若齢～中齢幼虫の時期（つる先、上位葉に丸く穴の開いた葉が散見される時期）の防除に努める。
- ③ 薬剤散布の際は、幼虫が生息する葉裏までよくかかるよう丁寧に散布する。

ナシ

1. ナシヒメシンクイ（第四世代幼虫）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、調査圃場のナシ果実において、被害果を認めず平年並である。
- ② 7月下旬までのフェロモントラップへの第二世代成虫の総誘殺数は、かすみがうら市および土浦市で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 被害果を見つけた場合は、土中深く埋める等速やかに処分し、成虫の発生を防ぐ。
- ② 早生品種（「幸水」等）で被害が認められた場合は、中生～晩生品種（「豊水」や「新高」等）で被害が多くなる傾向があるので注意する。
- ③ 薬剤は、10a当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。
- ④ 薬剤防除の際は、収穫前日数等に十分注意する。
- ⑤ ナシヒメシンクイ第四世代幼虫を対象とした防除適期は、第三世代成虫の誘殺数がピークに達した日の1～2日後である。かすみがうら市、土浦市、筑西市については、今後、病害虫防除所ホームページで情報を随時更新するので参考にする。

果樹共通

1. チャバネアオカメムシ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、ナシ園における果樹カメムシ類の被害果率（本年値 0.4%， 平年値 0.05%）は平年よりやや高い～高い。
- ② 7月第5半旬までの予察灯への総誘殺数は、水戸市で平年より多く（本年値 1,485 頭， 平年値 320 頭）， かすみがうら市で平年よりやや多く（本年値 843 頭， 平年値 740 頭）， 笠間市で平年並（本年値 2,517 頭， 平年値 3,035 頭）である。

（令和2年7月31日発表 病害虫速報 No.5 参照）

[防除上注意すべき事項]

- ① 夜温が高いと活動が盛んになり、果樹園への飛来が増加するので注意する。
- ② 果樹園内でカメムシ類を確認した場合は、収穫前日数等に十分注意して速やかに薬剤防除を行う。
- ③ 薬剤防除は、カメムシ類の活動の鈍い早朝に行う。
- ④ 今後、果実が肥大するカキやリンゴの圃場にもカメムシ類が飛来する恐れがあるので注意する。

（令和2年7月31日発表 病害虫速報 No.5 参照）

秋冬ネギにおいて軟腐病の発生に注意しましょう！

ネギ軟腐病は、高温時に土壤水分が高いと発生が多くなります。

7月下旬現在、夏ネギ調査圃場での軟腐病の発生は、発病株率（本年値 14.4%， 平年値 0%）， 発生地点率（本年値 60%， 平年値 0%）がともに平年より高い状況です。今後、秋冬ネギ栽培においても以下の対策を行い、発生に十分注意しましょう。

[病害の特徴]

葉鞘軟白部が淡褐色水浸状となり、地際部から折れて軟化腐敗し、悪臭を放つ。

[防除上注意すべき事項]

- ① 圃場の排水を確実にし、土壤の多湿や湛水を防止する。
- ② 本病の病原菌は傷口から感染するため、管理作業で葉等に傷をつけないようにする。特に、降雨前後の作業時には十分注意する。
- ③ 土壤中に残った発病葉鞘内で病原菌が長期間生存して伝染源となるので、被害株は丁寧に抜き取り処分する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
水稲	イネツトムシ	発生量：平年並	7月下旬現在，平年並の発生である。葉色が濃い水田では発生に注意し，発生が多い場合には，幼虫が小さいうち（葉先が巻かれ始める時期）に防除を実施する。
ナシ	黒星病	発生量：やや多い	7月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
ブドウ	べと病	発生量：多い	7月下旬現在，平年より多い発生である。袋掛け後の防除を徹底する。
	灰色かび病		7月下旬現在，平年より多い発生である。
	晩腐病	発生量：平年並	
	褐斑病		7月下旬現在，平年並の発生である。
秋冬ネギ	黒斑病	発生量：－	気温が上昇すると発生しやすくなるため注意する。
夏秋ナス	アザミウマ類	発生量：平年並 ～やや多い	7月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	アブラムシ類	発生量：やや多い	7月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
共通害虫	オオタバコガ	発生量：平年並 ～やや多い	7月下旬現在，フェロモントラップへの総誘殺数は平年並～やや多い。
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多い ～多い	7月下旬現在，フェロモントラップへの総誘殺数は平年よりやや多い～多い。

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 8月1日から8月31日)

気象庁(7月30日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	20	30	50
	降水量	関東甲信全域	40	30	30
	日照時間	関東甲信全域	30	30	40

[概要]

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 8月1日(土曜日)から8月7日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率50%

<2週目の予報> 8月8日(土曜日)から8月14日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確立60%

<3週目から4週目の予報> 8月15日(土曜日)から8月28日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類^{*}(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(令和2年4月24日発表)の防除所レポート参照